



多言語による教皇ミサと日本の社会

太田 達也

2020年は新型コロナウイルス感染拡大の影響で、海外との自由な行き来が難しくなってしまった。大規模な国際学会は軒並み延期となり、教会ではミサの中止あるいはオンライン配信という新しいかたちがとられた。このような状況になった今になって思い返すと、2019年11月に教皇フランシスコの来日が実現できたのはまことに幸運なことであったと思う。来日した教皇の動向は連日ニュースや新聞で報じられ、その言動は大きな注目を浴びた。私自身も東京ドームでのミサに参加し、直にその空気に触れることができたことに深く感謝している。

教皇ミサに参加して特に印象に残ったのは、多言語によるミサだったことである。日本が多言語社会であることは研究者の間ではいまや自明のことだが、一般社会においては必ずしも「自明」と言えるほどの認識ではないだろう。ユネスコの消滅危機言語リストには日本で話されている8言語が挙げられている一方で、日本が「単一民族・単一言語国家」であるといった政治家の発言や在日コリアンに対するヘイトスピーチは後を絶たない。しかし近年、在日外国人の数はますます増加し、日本の総人口の約2パーセントが「外国人」、そしてその多くは日本語を母語としない人々である。教皇ミサでは、そうした日本の多言語状況を反映するかのように、日本語、韓国語、スペイン語、ポルトガル語、ベトナム語、タガログ語、英語、ラテン語が用いられ、聖歌もいろいろな言語で歌われた。日本語と英語さえ用意しておけばよいだろうといった安易な発想とは真逆のコンセプトによる多言語ミサは、これからの日本社会のあり方を考えるうえでひとつの規範を示してくれるものだろう。

一方、このことの裏返しでもあるのだが、「多言語」ではあっても「複言語」ではない今の日本社会の縮図を見たようにも感じた。「複言語」という言葉は『ヨーロッパ言語共通参照枠』（CEFR）で用いられている概念で、「社会」におけるさまざまな言語集団の併存を意味する「多言語」と対比され、「個人」におけるさまざまな言語能力の併存の意で用いられる。先述のように、日本は言うまでもなく多言語社会であるが、では各人がそれぞれ複数の言語を片言でもいいから心理的障壁なく使用できるか、あるいは少なくともそうした姿勢が育まれているかといえ、まだまだそうであると言うには程遠いのではないだろうか。今回、多言語で行われた教皇ミサに参加して、その先進性に感服すると同時に、今後の日本社会が克服すべき課題をつきつけられたように思う。

教皇フランシスコは、東京ドームでのミサに先立って若者たちとの対話イベントに参加され、その中で難民を積極的に受け入れるよう呼びかけられた。このこともニュース等で大きく報じられたが、日本に向けられたきわめて意義深い発信であったと思う。難民についての意見を学生に尋ねると、率直に恐怖感や嫌悪感を表明する人も少なくないが、その多くは知識や情報の不足と無関心に起因すると思われる。それだけに、今後もっと「複言語・複文化」の視点から、他者への関心と寛容性を促進する教育に取り組み、「自国さへ／自分の住む地域さへよければよい」といった「〇〇ファースト」のような狭い視野を克服して「地球規模」で人々の平和と共生社会の実現に貢献できるような人材を育成すること——これこそがカトリック大学につとめる教員に課せられた重要な課題のひとつであるとあらためて実感させられた教皇訪日であった。

（OHTA, Tatsuya : 外国語学部教授）

教養社とは

はじめに

『カトリコス』第34号(2019年11月発行)で、本学の教員であったかくれキリシタン研究の先駆者、田北耕也氏についての記事を掲載した際に、「南山学園教養社」なる出版社から刊行された、William D. Ryan, 田北耕也共著『聖フランシスコ・ザベリオ = Saint Francis Xavier : founder of Christianity in Japan』(1949)という本の存在を知ることになった。その本には「南山学園内教養社」と印刷されていたが、これまで耳にしたことがない「教養社」という名の出版社が南山学園に存在したのであろうか。そうだとすれば、いったい誰が、いつ、どんな目的で創り、そしてどんな本を発行したのだろうか。私たちはその謎を追ってみることにした。

1. 雑誌『アヴェ(Ave)』とアヴェの友会

その手がかりは、まず『神言修道会来日百周年記念誌』の中に見つかった。その記事によると、秋田県の横手教会の主任司祭であるドイツ人神父により刊行された機関紙『アヴェ』が、横手・秋田・山形の鶴岡の三教会の青年連盟「アヴェの友会」により月刊誌『アヴェ』に発展したことが、「教養社」の出発点であったということである。

1930(昭和5)年春、横手教会主任のガブリエル神父は、同地の男子の信徒や求道者たちから成るカトリック研究会に「アヴェの友会」という名をつけて、同年6月にガリ版刷りの機関紙『アヴェ(Ave)』の1号を発行した。その発行を続けているうちに、この機関紙が他教会の信徒たちにも愛読されるようになり、1933(昭和8)年1月、ガブリエル神父は秋田教会の白川友吉伝道士や鶴岡教会の成田朝治郎伝道士らに呼びかけて「アヴェの友会」を青年連盟として再結成し、横手・秋田・鶴岡の三教会の青年会が交互に編集を担当して月刊誌『アヴェ』を発行するようになった。ガブリエル神父は1911(明治44)年から1924(大正13)年まで鶴岡教会で活動、その後秋田教会の主任司祭を務め、1929(昭和4)年に自ら開拓した横手に教会を新設し転任しているので、神父にとっては、当時の秋田教会と鶴岡教会は自分の古巣とも呼べる馴染みのある教会であり、呼びかけた人々は以前から親交があり信頼できる仲間だったというわけである。ガブリエル神父によると、この月刊誌発行の目的は「青年自身の修養と思想の錬磨にあるので、言ひ換へれば、将来の精神戦のリーダーを養成する」ことに置かれており、そのため内容も当時の一般青年たちの興味を起こさせるものが多く、カトリック信者ではない青年たちの間でも広く読まれるようになったそうである。

このような青年連盟による出版事業の源は、19世紀後半から世界に広がっていったアクティオ・カトリカ(英語圏ではカトリック・アクション)と総称される活動だとされている。アクティオ・カトリカは、広義には「カトリック教会において聖職者の指導のもとに一般信徒が宣教、社会福祉、教育、出版などの事業を行う組織およびその活動」と定義されている。当時、秋田教会では『アヴェ』の発行の他にも、若い女性たちの精神修養や社会福祉活動を目的とした聖母姉妹会の創立や白川伝道士による映画布教や童話語りなど、様々な活動が行われていたようである。聖母姉妹会は、ゲマインダ神父(GEMEINDER, Georg SVD)の指導によってまずガリ版刷りの月刊誌『小百合』を発行、その後『冠されし百合』『姉妹』と改題するなかで文化誌に発展し、その頃には会の名称も「日本姉妹会」と改まって、戸塚文卿神父が会長を務める大きな組織に発展した。『アヴェ』にも「カトリック・アクション[ママ]の教義的根拠」6巻7・8号(No.32, 1935)・6巻11号(No.35, 1935)、「カトリック・アクション[ママ]の一考察」10巻1号(No.72, 1939)など関連の記事が掲載されており、7巻11号(No.47, 1936)の編集後記には「どうぞ本誌が、カトリック・アクション[ママ]の第一線に立つ青年の熱気ともなる様に読んで下さいーペンを執って下さい。」と読者に呼びかけている。

1933(昭和8)年6月にガブリエル神父が神言会日本準管区長に選出され、多治見教会主任司祭を兼務して多治見の神言修道院に移り住むようになると、「アヴェの友会」の本部も多治見に移される。この時期は、南山学園の創立者ライネルス神父(REINERS, Joseph SVD)が1932(昭和7)年に南山中学校を設立し、1933(昭和8)年中学校隣地にピオ11世館が建てられ、1936(昭和11)年に南山小学校が併設開校するという南山学園の発展の礎の時期とも重なっている。

2. 多治見神言修道院での活動

1934(昭和9)年8月に初めて神言修道院で発行された『アヴェ』23号(No.23, 1934)の冒頭で、ガブリエル神父は「『アヴェ』の起源と其目的に就いて」と題して執筆している。その中で、原稿募集と発行はこれまでどおり横手・秋田・鶴岡の各グループが交代に受け持つこととするが、印刷・編集は一定の地に置くのが好都合であるとして、これまでとは方針を変えて岐阜県多治見町神言修道院内に置くこと、またこれまでの謄写版刷りから活字版に変更し、名古屋

において安価に印刷するプランができあがったことなどが記されている。また雑誌の内容は、「主として修養文芸を旗印とするが、科学の論文も大いに歓迎し、又一方宗教は修養の要点であるから、アヴェ誌に宗教のアトモスフェアが濃厚であることは、寧ろ当然のことであると思ひます。ただ秋田に於ける総会にも決定された様に、成る可く未信者にも読み易いものと、したいのです。」とある。

編集の地が多治見神言修道院に定まり、新たに畑良雄氏が専任編集者に就任する。畑氏は東京外国語専門学校〔ママ、東京外国語学校の誤りか〕ドイツ語科を卒業、岩下壮一神父にカトリック教理を学び、モール神父(MOHR, Joseph SVD)によって1927(昭和2)年に受洗した後、神言会の会員たちの日本語教師として採用され、堪能なドイツ語を活かしてドイツ人神父たちに日本語をマンツーマンで教えていたようである。モール神父は1929(昭和4)年、神言会日本準管区長として当時の岐阜県豊岡町(現多治見市)に1万坪の土地を購入し、1930(昭和5)年神言修道院(木造3階建)と聖堂を建設し管区本部を置いた人物で、ガブリエル神父の前任者に当たる。

1935(昭和10)年の『アヴェ』6巻7・8号(No.32, 1935)の最終頁には、「アヴェ社の誕生」として、「此度神言修道院内にアヴェ社を設け、雑誌『アヴェ』祈祷書其他カトリック書籍類の御用を承ることに致しました。」とあり、神言修道院に編集・印刷の場を移してから1年余り、出版事業が本格化していく様子がうかがえる。やがて『アヴェ』誌は全国諸地方に会員読者を持つ特色ある青年文化雑誌に発展していく。『神言修道会来日百周年記念誌』には、「(アヴェの友会の)会員の大半は新潟知牧区と名古屋知牧区に属していたので、会員の集会は新潟・秋田・東京などで開催していた。一九三七・八年頃の発行部数は八〇〇部であったから、カトリック者でない会員購読者を含めて、その数値に近い会員が全国各地にいたものと思われる。」とある。

3. 教養社の誕生

本学に残されている『アヴェ』は多治見神言修道院に編集が移された23号(No.23, 1934)から最終号の11巻11号(No.94, 1940)までで、当初、横手・秋田・鶴岡の三教会の青年会で始まった「アヴェの友会」が、7年の間に名古屋、高岡、弘前、東京、北陸、会津若松、新潟、仙台、関西、気仙沼、北九州など新たな支部を次々に増やし、原稿執筆や編集に参加する様子がうかがえる。

しかし突然、『アヴェ』11巻7号(No.90, 1940)に「『アヴェ』改題：題名募集」「各方面のかねてよりの熱望により『アヴェ』を日本に於ける特殊の雑誌として存在せしめ、廣く全日本の青年層に進出させるため改題することにしました。日本語名で青年の教養文藝雑誌として、ふさはしい題名をアヴェの友青年會の諸君、一般讀者諸賢から募集致し参考に致すことにしました。」と掲載される。そして、『アヴェ』11巻9号(No.92, 1940)には、「『アヴェ』改題：題名決定投票」の見出しで、「アヴェの友青年會の諸君、一般讀者諸賢の絶大なる御協力の結果が左記の如き多数の題名となって編集室に集まりました。で、再び諸賢の御協力によって題名を決定致し度いと思ひます。全讀者の熱意ある御投票を期待してゐます。」とあり、「聖集誌、葡萄樹、香柏……教養……」など80の題名候補が挙げられている。

『アヴェ』11巻6号(No.89, 1940)から、それまで表紙に「AVE」「アヴェ」とあわせて小さく併記されていた「カトリック青年修養文藝雑誌」が「教養文藝雑誌」に変わり、11巻9号(No.92, 1940)からはさらにその下に「(取りて読め)」の文字が小さく添えられるようになったことは、誌名が変わる伏線だったのであろうか。

『アヴェ』最後の号、11巻11号(No.94, 1940)には「『アヴェ』誌は新年を迎へると共に題名を『教養』と改め、陣容を新たにし、機構を新たにして進発することになりました。」と掲載された。1940(昭和15)年、「アヴェ社」は社名を変更し、「教養社」が誕生する。それは誌面に書かれていたような読者からの熱望というよりは戦時体制下の諸事情、すなわち宗教統制や雑誌名における英米語の禁止、用紙配給といった事情が主たる理由であったようである。『神言修道会来日百周年記念誌』には次のように記されている。

しかし、一九四〇年秋頃から特別高等警察による監視が厳しくなったので、一九四一年一月発行の第九五号から『教養』誌に改題し、発行所も教養社に変更した。しかし一九四〇年九月に東京で開かれた出版物緊急会議で戦時の用紙節約・統制のため、小雑誌の自発的廃刊が勧誘されると、多くの地方的カトリック雑誌は同年一二月までに次々と廃刊した。しかし、用紙を少し余分に備蓄していた『教養』誌は、一九四一年一二月号まで発刊を続けた後終刊にし、会も解散した。

1940(昭和15)4月にガブリエル神父は米沢教会に転任する。ドイツ人であったガブリエル神父は軟禁されることはなかったものの、特別高等警察官に監視され、信徒の家を訪れる際にも警察官が同行していたようである。

『アヴェ』誌はガブリエル神父が米沢に移るとともに姿を消し、やがて後誌として誕生した『教養』誌もその後なんとか2年近く持ちこたえたものの消滅する。『教養』誌の最終刊となった12巻12号(No.106, 1941)の編集後記には、「新年度にはさらに本誌が面目をいやが上に多彩あるものとなりうるやう一段の御支援と力作の御寄稿を賜はるやう前以て御願ひいたす次第であります。」とあり、「原稿募集規定」も掲載されているので、終刊は本意ではなかったであろう。

4. 神父たちの存在

教会の信徒たちの先頭になつて、出版事業を進めてきたガブリエル神父とはいったいどのような人物だったのか。ガブリエル神父は、1907(明治40)年に神言会員3名が初来日してからわずか3年後、1910(明治43)年に来日して活動を始めた神言会の神父である。『秋田カトリック教会創立百周年記念誌』によれば、「ガブリエル師は情熱家で、説教では祭壇上から文字通り獅子吼して信者の布教上における消極性、不協力を叱咤し、又愛について語るときは涙を浮かべ、人の心に強く訴えるものがありました。」「師の布教活動の熱意はどここの赴任地でも発揮され、大きな成果をあげている。鶴岡しかり、横手しかり、多治見しかり……。アヴェの友会に見られる青年会指導は、最初の赴任地鶴岡から始まっている。即ち大正四年鶴岡教会青年会を結成させ、ガリ版刷機関紙『響』を発行している。そして秋田赴任後は、秋田教会の青年会を再発足させ、白川伝道士を中心にして教会活動の中心的役割を果たさせている。」とあり、自らに厳しく、子供たちや信徒にも厳しい面もあるが、愛情深く、意欲溢れる熱血漢の神父であったようである。ガブリエル神父によって若い信徒数が飛躍的に増えたという記録が残されている教会もあり、日本という未開拓の地になんとしても信仰を根付かせたいと必死の思いだったのではないだろうか。

一方で中学生の頃から植物に興味を持っており、来日してから採集した植物標本は3000種以上におよび、1951年当時、千葉県市川市にあった日本考古学研究所に滞在していたという経歴もある非常に多才な神父であったようである。

ガブリエル神父(GABRIEL, Theodor SVD)の略歴

1882(明15)年	ドイツ プレスラウ教区に誕生
1898(明31)年	ハインリヒ・クロイツの神言会に入会
1910(明43)年	聖ガブリエル大神学校で司祭叙階
1910(明43)年	9月来日 新潟で1年間日本語の学習
1911(明44)年	山形県鶴岡教会に着任
1924(大13)年	秋田教会に転任
1929(昭 4)年	秋田県横手教会を新設し、転任
1933(昭 8)年	神言会日本準管区長、多治見教会主任を兼務
1940(昭15)年	山形県米沢教会主に転任
1949(昭24)年	鶴岡教会へ転任
1952(昭27)年	豊田市聖霊修道院聖母園に転任
1962(昭37)年	83才にて帰天

ガブリエル神父の他にも活動に尽力した神父たちがいる。本学カトリック文庫に所蔵している教養社が発行した出版物は、雑誌を除くと11冊で、そのすべてが戦後の1947(昭和22)から1952(昭和27)年の5年間に出版されたものである。そして、出版物のほとんどは神言修道会のグドルフ神父、ローテル神父、グリンゲス神父の3人のドイツ人神父によるもので、発行所として「教養社」または「南山学園教養社」の名が記されている。当初の発行地は「多治見」であるが、1949(昭和24)年に「名古屋」に変更となる。神言神学院の移転が決定したからである。1949年、神言神学院のための土地・建物が名古屋市昭和区に準備され、建物の改修が進み、1950(昭和25)年に多治見から名古屋に移る。そして不思議なことに、1951(昭和26)と1952(昭和27)年に出版された3冊の出版物は表紙に大きな文字で「教養社」と記されているが、その発行は「秋田：秋田市広小路カトリック教会」となっている。秋田教会に移ったグドルフ神父が自分の著作物の表紙に「教養社」と記したことは間違いがないが、「教養社」そのものが秋田に移ったかどうかは今となっては確かめる術がない。

3名の神父については『秋田カトリック教会創立百周年記念誌』にその人物像がいきいきと記されているのでここにご紹介したい。

教養社の出版物、そして本を著した神父たちの姿から、「教養社」が秋田という地で交わった人々を中心とした信仰のひとつの拠点であったことが伝わってくる。最初に秋田で始まった「アヴェ(Ave)」の活動が、最後に「教養社」として秋田の出版物に刻まれていることは大変感慨深い。

グドルフ神父(Guddorf, Konstantin SVD, 1905-1985)

「学識とバイタリティに富んだ宣教師」として次のように紹介されている。

1905年西独ミュンスター教区生まれ。1933年叙階され、翌年来日し、多治見で日本語を習得、師の歴任地は多く、吉祥寺のアルベルト・ホーム、横手、名古屋・恵方町、佐渡(両津)、名古屋(ピオ館)、岐阜、新潟、ピオ館(南山大)を経て昭和25年から二年間秋田教会の助任。そして27年から28年まで主任をつとめる。その後、望みによりブラジルへ渡り、さ

らに西独へ移る。昭和43年再度来日して、南山大に勤められたが、54年西独に帰国し、現在当地で療養生活を送っておられる。深い学識の持ち主で教理神学の著書も多く著わしており、バイタリティに富んだ宣教活動を行なった。その説教は理路整然としたものだった由。又種々のエピソードを残されて、今も思い出を語る信者が多い。

*秋田教会助任司祭(1950-1952) / 秋田教会主任司祭(1952-1953)

ローテル神父(Rother, Alfons SVD, 1906-1974)

「龍神さんと闘ったローテル神父」として、次のような余話が紹介されている。

教会入口のななめ向いに、龍神を祭った神社が建っている。ここは藩政時代から有名な蛇柳の跡であるが、信心深いローテル神父は聖なる(?)教会のまん前にあるこの神社の存在が気になって仕様がな。ある日、ひそかに神社の近くにマリア様のメダイを埋めて、偶像が破壊されるよう祈った。しかし残念ながら偶像は強力で(?)奇跡は生じず、今も健在である。

*秋田教会助任司祭(1936-1938)

グントゲス神父(Gruintges, Jacob SVD, 1900-1980)

「文学演劇を愛好した宣教師」として次のように紹介されている。

叙階1926年9月29日。同年来日。金沢で日本語を学び、翌年秋田教会に助任として来任する。昭和3年佐渡相川教会、5年高田教会、9年小坂教会の主任を歴任して、昭和11年7月フリーゼ神父に代わって秋田教会主任となる。一年余りでオルトレ神父と交替し、助任として宣教に従事。日本古典文学への造詣深く、海外に日本文学を紹介する功あり。又演劇を若き頃より愛好し、教会では青年男女を指導してクリスマスには上演。戯曲家演出家としてプロ並みの才能を発揮した。著作活動も生涯通じて行っているが、秋田時代に著わしたものは『アーノルド・ヤンセン伝』が代表作。昭和19年中国に渡る。戦後長崎大村教会主任。名古屋、東京などでの著作出版による使徒職をし、昭和36年から40年まで聖霊学園付司祭として教壇に立つ。昭和45年本荘教会、46年大館教会を経て50年引退。1980(昭和55)年6月15日に永眠。80才であった。

*秋田教会助任司祭(1927-1928)(1937-1942)(1961-1965) / 秋田教会主任司祭(1936-1937)

5. 当時の出版状況

ここでは一旦「教養社」から離れて、当時の出版状況を俯瞰してみたい。『アヴェ(Ave)』が誕生した1930(昭和5)年～1931(昭和6)年頃は、カトリック教会の勢力が伸展し、文化的興隆と相まって大小様々な種類・形態の出版がなされた時代と、日中戦争以降の政府の各種統制に先んじたカトリック教会自身による出版物統制時代との、ちょうど端境期に相当する。

このうちの前時代(大正期以降、昭和5年頃まで)には、第一次世界大戦の影響や関東大震災の被災を乗り越えて、出版界全体の発展とともに、カトリック教会の出版事業も活況を呈している。従来は外国人宣教師の著書・訳書が大半だったのに対して、この頃より日本人聖職者・信徒による著作が目立つようになった。また、1919(大正8)年からはローマ教皇の使節が日本に駐留することになったこともあって来日する修道会が徐々に増え、遡ること1891(明治24)年には司教区制が敷かれて当時4つの司教座が置かれてから各教区は徐々に体制が整えられてきた。修道会や教区はそれぞれに機関誌を刊行し、そのうえカトリック教会の出版団体も活動に力を入れており、この時代は特に逐次刊行物は大きな進展を遂げている。ただし、教区も修道会ともに宣教師の母国流の手法と志向で運営されて独立性が強く、一致団結した一枚岩というには程遠かったようである。

その頃のカトリック出版界の状況を理解するためには、1916(大正5)年に発足した日本公教青年会の動きをどうしても把握しておかねばならない。元は岩下壮一が当時の学术界・思想界の潮流に抗するべくカトリズムを研究し、理論と信仰を深めて護教と布教の一翼を担おうとする小さな集まりであった。この会では出版も主要事業のひとつとして考えられていたが、次第に組織化されて、1921(大正10)年には内部報的性格の『公教青年会会報』を創刊した。その2年後には一般向けの『公教青年時報』(半月刊)となり、続いて同年『カトリック・タイムス』(旬刊)に成長し、さらに1931(昭和6)年には『日本カトリック新聞』(週刊、1946(昭和21)年に『カトリック新聞』に改称)へと開展していく。同紙は『カトリック・タイムス』となった時点で、日本カトリック教会の実質的な機関紙になったとされている。また雑誌としては、布教・護教・研究を目的に1920(大正9)年『カトリック』(『カトリック研究』『カトリック思想』『世紀』と変遷、1994(平成6)年休刊)を創刊しており、明治期より刊行されていた『聲』とともに、二大有力誌と位置づけられていた。

一方、1931(昭和6)年には(日本)カトリック出版物全国統制協議会が開催され、各教区から教区長またはその代理と出版関係責任者が招集された。ここでは、カトリック・アクションの展開に向けて、個々に分立していた逐次刊行物をできるだけ統合して、中央への集約を図る旨が話し合われた。ガブリエル神父も新潟教区から参加している。しかし、この前段として1929(昭和4)年のカトリック中央出版部の設置を押さえておく必要がある。これは従来ばらばらに行われて

いた各種出版活動をカトリック教会が統制しようとするもので、後の出版物全国統制協議会の狙いと軌を一にするものであった。具体的には、中央出版部独自の出版はもとより、前述の有力2誌『聲』および『カトリック』について企画・編集段階から携わるために中央出版部から発行することとし、全面刷新して一層の発展を目指した。雑誌がこの2誌に絞り込まれた理由は、『聲』は伝統があるものの主筆神父の編集が固定化して変化に乏しく改革が望まれていたためであり、『カトリック』は歴史は浅いが刊行目的と積極性が買われたためである。そして、出版物全国統制協議会により各教区の力を結集して2誌に収斂されていく。これは内容の充実のみならず、購読者の分散を防ぎ、経済的負担への配慮を意図してのことである。しかし当事者にとっては、過度な統廃合と捉えての不満や生き残る雑誌に対して不公平感を抱くことになり、しこりとして尾を引いたようである。『アヴェ』自体は当該協議会の方針にもかかわらず刊行を継続することになるが、この点はガブリエル神父も相当気にしていたらしく、同誌23号(No.23, 1934)冒頭「『アヴェ』の起源と其目的に就いて」では「此の機関誌と他のカトリック出版物との関係に就いて(中略)、アヴェは断じて他のカトリック諸出版物に障害を与えるものでない」「本誌の刊行が他の出版物に悪影響を与えるものではなく、寧ろこの機関誌を良く育てる為には青年達が従来よりも尚熱心に他のカトリック的資料を研究する必要に迫られる」「殊にカトリック中央出版部と、アヴェの友会との間には親密な関係があつて欲しいと希つてゐるのです。特に良い論文が本誌の編輯室に入ったならば、協議の上中央出版部に譲り、又ニューース[ママ]の交換もして貰いたい」などと記述している。

1931(昭和6)年にはもうひとつ特筆すべき出来事があった。それはカトリック教会の事実上の機関紙(新聞)であった『カトリック・タイムス』が教会(カトリック中央出版部)に移され、名実ともに教会の機関紙となったことである。とはいえ、雑誌の中央集約に対する反応とは異なり、好意的に受け止められたらしい。というのも、時の担当者は新聞の取材・編集・発行等に関する専門的知識や技能を持ち合わせておらず、加えて遠隔地取材のための通信網や確実な代金の支払いが見込まれる多数の読者の確保、司教等の人材不足等々に懸念材料が多く、できるだけ二重投資とならないよう経済的・合理的に進めたい思惑があったようである。

『アヴェ』が『教養』に改称される頃にはいよいよ戦況が厳しくなってくる訳であるが、その前夜の状況を総括するかのように、元本学園事務職員で、カトリック中央出版部では既述の雑誌・新聞の編集等に当たった松風誠人は「この統制は発展のために暫くの間やむを得なかつた処置と解されよう。」「昭和十六年大戦がはじまって出版物統制が強行されたとき、この昭和六年の自発的統制の事実は役人を驚かし、カトリック側に同情を寄せる一因となつた。」「(『聲』963号)などと述懐している。また鈴木高明も「カトリック出版物と出版界を大概すると、この昭和初期数年の動きに大きな意味があり、信徒たちの動き、教会当局の判断が、分岐点を誤らなかつた。」「(『藤女子大学・藤女子短期大学紀要』第1部28号)と評価している。

『アヴェ』の記事の中には、紙の節約のためか、文章の切れ目が悪い場合に10ページも先の他記事の空きスペースに続きを掲載するような、涙ぐましい努力も垣間見える。しかし、こうした物資不足よりも思想統制や言動の制限、監視や迫害の方がはるかに苦難の度合いは大きいと思われる。『アヴェ』に掲載された原稿募集要領に、時局問題を取扱つたものを謝絶する一文を見ると、平和の尊さを思わずにはいられない。

6. なぜ「教養(社)」であつたのか

前章で一旦離れた対象に再び接写する体で、「教養(社)」という名称そのものについて、あるいはなにゆえ「教養(社)」であつたのかについて、跡付けてみたい。

『アヴェ(Ave)』の投書欄「こだま」での要望と戦時体制下における制約が誌名変更の要因ではあるが、それだけでは数多く挙げられた候補の中からなぜ「教養」が選択されたのかの理由にはならない。経緯は3章でも触れたように、公募により読者から誌名候補を挙げてもらい、その後の投票によって改称誌名を決定しているが、手始めに候補を列記すれば次のように80種であつた。

聖集誌、葡萄樹、香柏、青年時代、躍進青年、天地人、知友、芝蘭、地の塩、栄光、光明、永遠、神言、世の光、青年と知性、真生、真理の光、幸運の星、文藝の華、星雲、新声、研友、新星、みちびき、聖の友、騎士、若鷹、鳩部隊、栗巢、青年の糧、一心、青年の友、帰一、清き瀧、清泉、愛の友、巨斧、善倫、橄欖、青麦、曉星、使徒、新約、復活、公教青年、日本公教青年会誌、真理、真理の友、益友、歓迎青年、曉の鐘、搖籃、新生、新倫理、倫理、教養、曙、黒潮、真友、心の糧、曉、光、群星、兄弟、牧羊、白樺、新曲、塔影、流星、明星、砂丘、木靴、文化、新思潮、新思想、新風、極光、建設、未来、将来

何とも若々しい清新な息吹が伝わってくるのと同時に、秋の実りを迎える前の(良くも悪くも)青田の匂いをも感じさせる。一体なぜこれだけ多数かつ多彩な候補の中から「教養」が選ばれたのであろうか。

はじめ「こだま」欄には「題名のアヴェは何とかならないでせうか?」「アヴェが広く日本全青年層に進出するためには題名のアヴェを改められなければならないと考へるが、諸氏如何?」などと、批判は散見されるが具体的な提案は見ら

れなかった。それが「教養文藝雑誌」と銘打たれると若干風向きが変わったようで、「私にはアヴェが唯一の教養誌である」「教養文藝雑誌としたのは英断」などの意見が顔を出している。

ここでやや遠回りをして「教養」という語の概念から考えてみたい。たとえば、『新カトリック大事典』では「教養という言葉に相当する西欧近代語 (culture, education, Bildung など) からの翻訳語であり、それらは元来すべて文化、教育を意味している。これらの言葉の根源である古典ギリシア語パイデア (paideia) が日本語の教養に最も近いと思われる」「古代ギリシア的都市国家の市民として生活するための教育が前提にした文化的諸価値の総合と、それによって豊かに生きることを可能にする教育・養成の成果を指す。同時にそのようなものを教育を通して学び、身につけ、高尚な趣味、感受性、考え方を生きたものとして会得した状態を指す。」とある。他方、『日本国語大辞典』では「学問、知識などによって養われた品位。教育、勉学などによって蓄えられた能力、知識。文化に関する広い知識。」と記されている。語源については初耳だとしても、言葉の意味についてはおおそ納得できる想定内ではなかろうか。

さて、思い起こせば『アヴェ』の表紙に「教養文藝雑誌」と印刷される前には「カトリック青年修養文藝雑誌」と記載されていた。では「修養」といえば、『新カトリック大事典』にはその項目が無い。『日本国語大辞典』には「学問をおさめ、徳性をやしなひ、より高度の人格を形成するように努めること。精神を練磨し、品性をやしなひ、人格を高めること。」とある。注目したいのは、第一に『新カトリック大事典』には「教養」の項目はあるが「修養」の項目は無い点である。『キリスト教大事典』についても同様である。これは「修養」という言葉がキリスト教の世界で次第に信者を惹き付けなくなったからであろうか。『教養』と改題された後の12巻10号(1941)に、ちょうど「修養と教養」(大山篤朗)なる小文が載せられており、「『教養』(と)いう文字が今日ほど一般につかはれてゐなかつた頃には『修養』の文字が通用してゐた」とある。また「『修養』といへば主として道徳的に自己を高め磨きあげる努力の意味があつた。」とか、「教養」はそれだけに留まらず「あらゆる智的進歩、知識の獲得といふことが意味されている。」とも述べている。あるいは教養人に「品性」の「磨き」や「真理に対する敬虔な態度」、「知識の獲得」への「努力」を求めている。そして「真の教養人は実践の人である。いはゆる知的行の人」であるとし、「『修養』と『教養』との相違はこゝにある」と結論付けている。『キリスト教大事典』でも「キリスト教によると、罪の力から解放された人間、また人格としての人間は、単に教養によって形成されるのではなく、信仰における神との交りによってつくられる」として、「教養」という言葉の信仰や神とのつながりと、間接的には「修養」という言葉が持つ限界とを示している。

第二の注目点は、「教養」という項目がキリスト教の専門事典に取り上げられていること自体である。キリスト教において、もしくはカトリックにおいて、「教養」が意味することは決して軽くはないということに他ならない。改題後すぐの12巻1号(1941)で「教養以上のもの」(齊藤石雄)と題して、カトリック教会の使命は人々に「教養以上のもの、信仰を与えること」と記述しているのは不思議ではないとして、遡ること改題前の『アヴェ』11巻4号(1940)でも文字通り「教養」(竹内巽)なる記事が寄せられている。ここでは、明治以来の西洋文物や単なる知識としての輸入にのみ重きを置かれていたことを嘆き、西洋人が長い年月をかけて築き上げた文化とその過程の理解や、品位・品格を兼ね備えた「教養」の獲得を説いている。加えて「西洋の教養のよって出ずる源である所の宗教、即ち基督教」に触れることの必要性和、「真の教養は、頭で学ぶべきものではなく、寧ろ心で体得すべきもの」であること、「その心の学を中心をなすものはなにかと云えば、真の宗教、基督教を除いて他にない」ことを述べている。はたまた、商法学者ながらカトリック教徒としても知られた田中耕太郎の著作『教養と文化の基礎』(1937)なども多くの信徒に読まれたとされており、新誌名選択に何らかの影響を与えた可能性は否定できないのではないか。

蛇足かもしれないが、前述した『カトリック』9巻11号(1929)の巻頭「謹告」に、「『聲』は信者の教養を主眼とし、『カトリック』は研究と護教とを目的」とする旨が掲示されていたという。翻れば『アヴェ』が目指したのも「教養文藝雑誌」であった。結局、灯台もと暗し、本誌の出版目的を端的に表現する「教養」に立ち返ったかたちとなったと言ってもよいのかもしれない。

「教養」そのものにベクトルは無い。誤解を恐れずに言えば、薬にも毒にもなる。それを正しく方向付けして実践に結び付けるのが、カトリックの教えであり信仰であると捉えれば首肯できるのではないか。学問の総合化と教養課程・科目(本学では共通教育)の重視が叫ばれて久しい。本学では2017年度に「教養」の文字を冠した国際教養学部を開設した。単に身に付けるだけでなく、それを実践に活かす前提での「教養」を念頭に、ミッションスクールとしての建学の理念やカトリックの精神にもとづく教育が行われている。暦が一回り以上する時を経て「教養」の名称が学園内に復活した小さくないご縁の意味を噛みしめたい。

7. 教養社の出版物

最後に、教養社が出版し、カトリック文庫に残されている11冊の図書と雑誌4タイトルをご紹介します。

図書:①タイトル・著者・シリーズ名など、②出版地・出版者、③出版年、④ページ数・大きさなど、⑤内容
雑誌:①タイトル、②巻次・年次、③出版地・出版者、④出版年、⑤刊行頻度、⑥内容など

- ①社会的反省の為現代大災禍の眞意義 / ローテル著 ; 花坂壽[共助] - (カトリック精神の力; 第2篇)
 ②多治見: 教養社
 ③1947.5
 ④34p; 19cm
 ⑤タイトルにある「現代大災禍」は、直接的には本書が発行された当時を終結したばかりの第二次世界大戦を指す。現代社会にはびこる無神論的唯物論と不信仰は思想・政治・道徳を崩壊させる現代悪の大本源であり、さらなる大災禍を招くと警告している。カトリック教会の立場から、大災禍を回避する唯一の方法として、不信仰を悔い改め神に立ち帰ることを説いている。



- ①星空の神秘と神の信仰 / ローテル著 ; 花坂壽 [共助] - (カトリック精神の力; 第3篇)
 ②多治見: 教養社
 ③1947.7
 ④36p; 19cm
 ⑤無神論者、特に科学者は神の存在と自然科学との対立を主張するが、著者は科学での発見は創造主である神の叡智と全能さを証明していると捉える。全宇宙構造は神のご意志により完璧な秩序で保たれており、科学で解明できる現象はほんの僅かであり、星空は神の天地創造の御業の果てなき美しさを象徴するものであるとする。高名な天文学者ほど研究を深めるにつれ、神を畏れ敬虔なクリスチャンとなることが多いとしている。布教書。



- ①聖母の御國: ファチマとヘーデの奥義 / ローテル著 ; 花坂壽, 榊原廣土共助
 ②多治見: 教養社
 ③1948.2
 ④2, 2, 291p
 ⑤1917年に起きたカトリック教会公認の奇跡、ファチマ(ポルトガル)における3人の牧童への聖母ご出現(6回)と、奇跡の数々、ファチマの巡礼地としての発展、牧童たちのその後がノンフィクション小説のように描かれ、聖母ご出現についての著者の神学的な考察とキリスト教信仰の勧めも著されている。ファチマの奇跡と深い関係があるとして、教会未公認のヘーデ(ドイツ)での4人の少女への聖母のご出現(1937~1940年に105回)にも触れている。



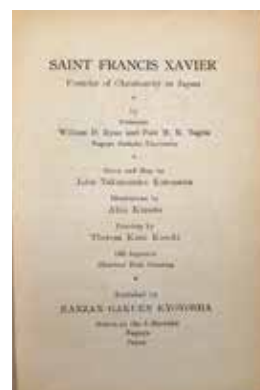
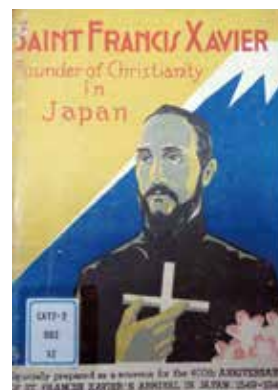
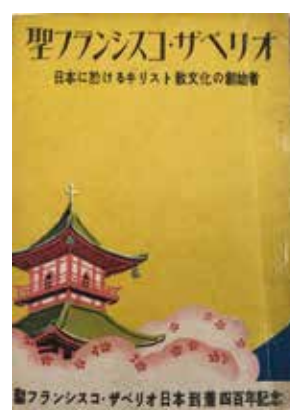
- ①禁断の樹: 恋愛 / ローテル著 ; 花坂壽共助
 ②多治見: 教養社
 ③1948.5
 ④118p; 19cm
 ⑤神父が著した恋愛(婚姻を前提としない男女交際や姦淫など)を戒める道徳的な内容。主な対象は青少年で、小説、映画、社交ダンスなどの娯楽を避ける、娯楽に積極的な職場や友人関係に身を置かないなど、厳しいキリスト教的倫理観に基づいて生活することを勧める。一方、堕落した生活や思想をキリスト教信仰によって悔い改めれば罪が赦されるとも説いている。布教書としての側面もある。



- ①祈祷集 / 神言会編
- ②名古屋：教養社(南山学園内)
- ③1949.3
- ④10, 449p ; 13cm
- ⑤毎日の祈祷、典礼暦に基づく各種祈祷、ラテン語の聖歌とその日本語訳、ラテン語の祈祷(「Preces ante Missam(聖霊に対するミサ前の祈祷)」)が掲載されている。



- ①聖フランシスコ・ザベリオ = Saint Francis Xavier : founder of Christianity in Japan / William D. Ryan, 田北耕也共著
- ②名古屋：南山学園教養社
- ③1949.4
- ④29, 28p, 図版2枚 ; 19cm
- ⑤フランシスコ・ザビエルの伝記 (日本語と英語の併記)。生い立ち、イグナチウス・ロヨラとのパリ大学での出会い、ロヨラ師とのイエズス会創始、極東という困難な環境下での伝道の功績、各地での社会改革者・社会事業家としての姿、晩年は中国伝道が叶わずひっそりと帰天したことなど、のちに列聖されたザビエルの波乱の人生を読みやすい筆致で描く。



- ①聖霊(第3版) / ゲドルフ著
- ②名古屋：教養社
- ③1949.5
- ④3, 162p ; 15cm
- ⑤三位一体の神のうち最も概念を理解しづらい聖霊について、あらゆる角度から神学的に解説しており、布教書としての役割もつ。聖霊の定義・働きについての解説、聖霊黙想の手引き、教会・家庭と聖霊の関わりなどを全16章にまとめ、終結の辞として「聖霊に尊敬の効果」について述べている。入信希望者にはとっては難解な内容と思われるが、神学的に要領よくまとめられ、信者には信仰の手引書として読み応えのあるものとなっている。



- ①ハレムの白百合 / グリントゲス著；安藤美樹枝訳
 ②名古屋：南山学園教養社
 ③1949.7
 ④118p；19cm
 ⑤キリスト教信者であるスペイン人女性ミリアムを主人公とした小説。1200年代、侵略戦争によってトルコの女奴隷となったミリアムが、異郷の地で苦難の中、信仰を貫き通し続ける様子が描かれる。作中、イスラム社会で暮らす周囲の人々にキリスト教を布教する描写が散見されることから、単なる物語的な読み物にとどまらず、一貫した信仰心・布教活動の必要性などが説かれた教養書としての側面もうかがえる。



- ①キリストの御教：独学用 / コンスタンチン・グドルフ著；上巻
 ②秋田：秋田市広小路・カトリック教会：教養社
 ③1951.7
 ④236p / 228p；19cm
 ⑤キリスト教義の解説書。上下巻の全2巻構成の上巻。「人間は何のために生きるのか」といった問題を導入とし、キリスト教についての基礎的な知識を記している。全26章立てになっており、各章において「神」「人間」「天使」「三位一体」「罪」などキリスト教を読み解くためのキーワードが設定されている。附録としてキリスト教の基本信条である「使徒信経」と、信者が送るべき模範的な生活を示した「信者の一日」が巻末に収められている。



- ①キリストの御教：独学用 / コンスタンチン・グドルフ著；下巻
 ②秋田：秋田市広小路・カトリック教会：教養社
 ③1951.9
 ④256p / 253p；19cm
 ⑤キリスト教義の解説書。上下巻の全2巻構成の下巻。宗教の必要性を説いた上巻に引き続き、教義内容についての解説が発展的に進んでいく。全27章立てで、おもに信者が守るべき「十誡」に大半の紙幅を割いている。その他「ミサ」「婚姻」「秘蹟」といった用語についても章を別にして説明。全体の構成・各章の内容ともに明快。



- ①毎日の十字架の道 / コンスタンチン・グドルフ著
 ②[秋田]：秋田市広小路カトリック教会：教養社
 ③1952.2
 ④57p, 図版1枚：挿図；15cm
 ⑤十字架の道とは、一般的にはイエス・キリストが捕縛され、十字架を背負って刑場であるゴルゴタの丘までひかれていく場面のことである。カトリック教会は、「十字架の道行」としてキリストの捕縛から埋葬(復活)までの一連の受難を14場面ないし15場面に分け、黙想し祈りを捧げる信心業を行うが、本書は一般的な十字架の道行の手引書ではなく、毎日十字架の道を黙想し祈るための入門手引書。



- ① アヴェ(Ave)(『教養』継続前誌)
- ② [no.1(1930.6)] - no.36(1935.12) ; 7(1)=no.37(1936.1) - 11(11)=no.94(1940.11)
- ③ 横手：横手カトリック研究会(出版者変更:横手カトリック研究会→[AVEの友會横手グループ→AVEの友會秋田グループ、などと、横手・秋田・鶴岡の各グループが持ち回りで担当]→アヴェの友會多治見グループ(No.23-No.24)→神言修道院(No.25-No.31)→アヴェ社(No.32-No.94))
- ④ [1930]-1940
- ⑤ 月刊
- ⑥ 表紙に印刷された誌名関連情報として、カトリック修養文藝雑誌(No.23-No.24)→カトリック青年修養文藝雑誌(No.25-No.88)→教養文藝雑誌(No.89-No.94)、と変遷。また、11(9)より表紙に「取りて讀め」と表示。



- ① 教養(『アヴェ(Ave)』継続後誌)
- ② 12(1)=no.95(1941.1) - 12(9)=no.103(1941.9) ; 12(10)(1941.10) - 12(12)(1941.12)
- ③ 多治見：教養社
- ④ 1941-1941
- ⑤ 月刊
- ⑥ 講話、研究、評論、随筆、紀行などにより構成。12(8)まで表紙に「取りて讀め」と表示。



- ① 宗教研究
- ② 第1巻 第1號-第2巻 第27號
- ③ 名古屋：教養社
- ④ [1948]
- ⑤ 週刊
- ⑥ 製本印刷された表紙のタイトルは『宗教研究』となっているが、原本のタイトルは『宗教通信』。毎号4ページで刊行され、「キリスト教案内」として各号につきテーマを掲げて教義を解説している。入信希望者向けであるが信者にも読み応えのある内容。



- ① 聖書研究
- ② 第1巻 第1号-第2巻 第96号
- ③ 名古屋：南山学園教養社宗教通信部
- ④ [1954-1956]
- ⑤ 週刊
- ⑥ 製本印刷された表紙のタイトルは『聖書研究』となっているが、原本のタイトルは『聖書通信』。教会に通えない入信希望者のための通信講座として毎号4ページで刊行。ルカの福音書を第1章から数節ずつ取り上げて註解、聖訓、イエズス・キリスト伝、説教により構成。



おわりに

かつて南山学園に「教養社」なる出版社が存在したことは、関係者にさえほとんど知られていない。そのためか文献も修道会・教区関連などにわずかに見られるのみである。いきおい記事の執筆も、端布のパッチワークか周辺事項の紹介に留めざるを得なかった。しかし、ここまでの記述を多色刷りの版画のごとく重ね合わせることで、教養社とは一体何であったのか、読み手の脳裏に多少なりとも鮮明に浮かび上がらせられたなら幸いである。

教養社が名古屋市で出版した図書の奥付に記載されている「昭和区五軒家町6」は、現在の南山高等学校・中学校の男子部の住所である。教養社の所在は、以前は校舎として使用していたという1932(昭和7)年竣工のライネルス館だったのか、それ以外の建物なのか、今では確認する術がないが、銘々が想像力を働かせて、とある一室で仕事に励む神父たちに思い馳せるのも一興ではなかろうか。

【引用・参考文献】

- ・『神言修道会来日百周年記念誌』(神言修道会, 2015)
- ・『秋田カトリック教会創立百周年記念誌：飛躍100年』(秋田カトリック教会, 1984)
- ・青山玄『新潟教区宣教小史：新潟教区創立60周年記念出版』(カトリック新潟教区, 1972)
- ・『新潟カトリック教会百年の歩み：聖堂献堂50周年を祝して』(新潟カトリック教会, 1977)
- ・『創立60周年記念誌』(カトリック多治見教会創立六十周年実行委員会, 1990)
- ・荻原泉編『鶴岡カトリック教会天主堂八十年のめぐみ：献堂八十周年記念誌』(鶴岡カトリック教会, 1983)
- ・荻原泉編著『神の子羊：鶴岡カトリック教会略史』(鶴岡カトリック教会, 1996)
- ・荻原泉『鶴岡カトリック教会天主堂ものがたり：重要文化財・明治ロマネスク建築の記念碑』(東北出版企画, 1979)
- ・「カトリック出版回顧録：『カトリック大辞典』訂正のために」松風誠人(聲)960, p.31-35, 1957.12
- ・「布教委員会のはじまり：ノル師の出版物活動を中心に」松風誠人(聲)963, p.42-46, 1958.3
- ・「カトリック出版界の軌跡：昭和前期(大15-昭20)を中心に」鈴木高明(藤女子大学・藤女子短期大学紀要)第1部28, p.181-219, 1991.2
- ・上智大学、獨逸ヘルデル書肆共編『カトリック大辞典(4)』(富山房, 1954)
- ・『日本キリスト教歴史大事典』(教文館, 1988)
- ・『新カトリック大事典(2)』(研究社, 1998)p.377-378
- ・『日本国語大辞典(4)・(6)』(第2版)(小学館, 2001)4: p.499-6: p.1313
- ・『キリスト教大事典』(改訂新版)(教文館, 1968)p.300-301

(1～4：加藤 富美、5～6：石田 昌久、7：川簾 陽子・加藤 可純)

南山大学図書館「カトリック文庫」

「カトリック文庫」では、近代日本におけるキリスト教史の研究に資する資料群の構築を目的として、明治・大正・昭和初期のキリスト教関係出版物等を収集しています。これまで、購入はもとより、多くの皆さまからの貴重な資料の寄贈によって、コレクションを充実させてきました。この場を借りて、心よりお礼を申し上げます。

南山大学図書館カトリック文庫通信

カトリコス No.35 2020.11.1発行

<http://office.nanzan-u.ac.jp/library/>

編集・発行：南山大学図書館 カトリック文庫グループ

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18

Phone：052(832)3707/Fax：052(833)6986

* 図書館Webページでもご覧いただけます。